

ルネサスが
SANYOに
選ばれた理由。

協力:  Microsoft Office

広告 第2回『内部統制とITフォーラム』基調講演など内容をWebで公開中!!主催:日経

広告 [特集]世界をリードする心臓・血管医療 提供 東芝

広告 ◆オープン化粧品◆業務システム連携で在庫と物流コストが約30%減-富士通

広告 7月21日(金)SAPビジネス・シンポジウム'06 ジェフリー・ムーア来日講演決定

ビジネス:ネット時評(日経デジタルコアより)

更新:3月18日 07:00

多元性とデジタルと日本(中村 伊知哉)

冷戦と融和の象徴、ベルリン。1920年代のアール・デコの建物。ヒトラーが台頭する前の狂乱物価のさなか、夜ごとパーティーが開かれていたビルで、今日はドイツ交響楽団が現代音楽を演奏している。指揮は、ケント・ナガノ。

だが、このシンフォニーはいつものクラシックと少し違う。壇上には地元のこども50人が楽団に交じっている。弦楽器や管楽器の隣に6台のコンピューターが並んでいる。そして、こどもたちがパソコン画面でお絵描きするように作曲した作品が演奏されている。4人のこどもが布製のボールを握って音を奏でている。押しつぶす圧力やその形で愉快地に変えている。



別のグループのこどもは、こぶし大のカタツムリのような装置を指で叩いてリズムを作りだし、他の子のカタツムリに振り向ける。受信した子は、その音やリズムを変えて、また誰かにパスする。音色やリズムでコミュニケーションをとっている。

これは、MITメディアラボのトイ・シンフォニーという研究発表の一シーンである。ベルリンが世界ツアーの皮切りで、これから欧米日を2年かけて回る。日本企業(CSK/セガ/セガトイズ/アスキー)が研究スポンサーの日米プロジェクトで、英BBCも参加意向を示している。

■音楽の敷居を低くするために

いつのまにか音楽は、とても敷居が高くなってしまった。音を奏でるためには、訓練に次ぐ訓練を要する。そんな専門家の手から音楽を取り戻したい。世界中のこどもが演奏できるようになり、表現できるようになること。新しいインターフェースで、誰でも簡単に音楽に参加できるようにすること。

さらに、誰でも自分の作品を楽しく作れるようになること。作曲はお絵描きに比べて特殊な専門領域に入ってしまった。それも取り戻したい。例えば、ウェブ画面でお絵描きをすれば曲ができあがるようなシステムを開発すること。でき上がった秩序や様式をひっくり返すパンクな試みである。

リズムや音色やメロディーは、自分の国や地域や家族や趣味によってテイストが違う。世界のこどもたちが、それぞれの土着のリズムや音色で表現して、交換して、共有すれば、音楽じたいが変わるかもしれない。それがトイ・シンフォニーを支援する日本スポンサーの狙いだ。

少し前、このベルリンで、宮崎駿「千と千尋の神隠し」が金熊賞を獲得した。八百万(やおよろず)の神といういにしへのユビキタス世界を生き抜く現代少女の物語だ。97年にカンヌでパルムドールを取った今村昌平「うなぎ」、同じくカメラドールに輝いた河瀬直美「萌の朱雀」、さらには98年ベネチア金獅子賞の北野武「HANA-BI」、いずれも現代ニ

ツポンの土着が世界的な(というより欧州での)評価を得ている点が特徴的だ。

世界はあんがい多元的で、その多元性は個々の土着が表現することで保たれる。そしてそれは、日本が貢献できる領域だ。

■ITU事務総長の多忙

ベルリンに入る前、ジュネーブに立ち寄った。旧市街のサン・ピエール大聖堂は、16世紀にカルヴァンがプロテスタントを提唱した場所だ。旧秩序をひっくり返すパンクの拠点だ。

そのジュネーブでITU(国際電気通信連合)の内海事務総長にお目にかかった。かつての上司なので今も私は頭が上がらない。世界の通信主管庁の総本山のトップとして多忙を極める内海さんが走り回っている案件は、世界情報社会サミット。各国政府、産業界、NGOらの支援を得て、2003年にジュネーブ、2005年にチュニスで開催される。

デジタルデバイドがメインテーマになる。世界の誰もがデジタルの恩恵を受けるにはどうすればいいか。技術を共有しながら、固有の文化や価値観を保つにはどうすればいいか。そのうえで共有すべきルールは何か。話が世界に広がると、多元性の確保が重要マターとなる。まとめあげるのは難業だが、日本や日本人が地道に貢献する姿は誇らしく見える。

■多元的な世界での立ち振る舞い

国連の諸機関の本部がひしめくジュネーブだが、当のスイスはこのほど国民投票でようやく国連に参加することを決定したばかりだ。EUにも参加していない。むろんユーロも使えない。国際社会との独特の距離感を保っている。ドイツ、フランス、イタリアという大国に挟まれて生き抜く知恵なのだろう。

アメリカは国内は多様だが、国際的にはナショナリズムが鼻につく。そして日本は画一性が強いが、意思が不明確で国際的なプレゼンスが低い。どちらも多元的な世界での振る舞いが苦手だ。その中で、どんなメロディーやリズムを奏でていけばいいだろう。

壁が崩れた後に生まれたベルリンのこどもたちの演奏を聴きながら、そんなことを考えた。

-筆者紹介-

中村 伊知哉(なかむら いちや)
スタンフォード日本センター研究所長



略歴

1961年生まれ、京都市出身。京都大学経済学部卒。在学中はロックバンド“少年ナイフ”のディレクターなどを務める。84年郵政省入省。電気通信局、放送行政局、登別郵便局長を経て、通信政策局でマルチメディア政策、インターネット政策を推進。93年からパリに駐在し、95年に帰国後は官房総務課で規制緩和、省庁再編に従事。98年郵政省を退官し、(株)CSK特別顧問に就くとともに渡米、MITメディアラボ客員教授に就任。2002年9月から現職を兼務。経済産業研究所コンサルティングフェロー、(社)音楽制作者連盟顧問、NPO「CANVAS」副理事長を兼務。著書に『インターネット、自由を我等に』(アスキー出版局)、『デジタルのおもちゃ箱』(NTT出版)など。